言葉のはかり

岐阜大学教育学部附属小中学校 9年
金森 愛加（かなもり あいか）

「真面目だね」あなたがこう言われたら、どう感じるだろうか。恐らく良い言葉とポジティブに受け取る人が多いだろう。しかし、私はそうは思わない。この言葉は、私の胸にナイフを向けた言葉だ。

私は、今までの人生で何度も、真面目だと言われた。実際、言われていい気分になったこともあった。でも長い間、私を呪いのように苦しめてきたのも事実だ。何をやっても真面目だから当然。声をあげれば、真面目なあなたらしくないと言われる。真面目という言葉に私が消費されていく。それでも、言葉に見合った自分になろうと背伸びを続けた。大変な仕事も勉強も我慢したら、私自身を認めてくれるはず。それが望ましい姿だと自分に言い聞かせた。でもそれは本当の自分ではない。自分が何者なのか分からなくなった。

何年かたったある日。ふと、鏡をのぞき込んだ。そこには表情のない人形がいた。限界だった。誰かの望む自分を演じることに。そして、自分の心の全てを母にぶちまけた。真面目は苦労がなくていいと言われる。私の必死の努力は、たった1つの言葉で片付けられた。私はいつまでたっても言葉の檻から逃げ出すことができない。言葉で傷ついた自分もまた、母にきつく、汚い言葉を向ける。散々、言いたいことを吐き出すと、少しずつ私を取り戻していくのを感じた。

そもそも、「真面目」という言葉が厄介だった。「死ねばいいのに」という言葉は誰でもダメだと分かる。でも、真面目という言葉に、傷つく人がいるとは思わないだろう。だからこそ、葛藤があった。この言葉を嫌だと感じる自分がおかしいのかと悩んだ。それでも、言われれば言われるほど、自分がルールに縛られたつまらない人間のようで辛かった。私は、流行りのファッションや音楽の話が好きだ。真面目はそんなこと言わないと思ってる？そんなことないよ。あの頃の私は真面目というフィルターを外して、ありのままの私を知って欲しかったんだと思う。

15になった私。そこには、不真面目な一面をのぞかせた私がいる。友達と冗談を言ってみる。楽しい。でも、真面目な自分も大切にする。ある人が教えてくれた「真面目に不真面目」という言葉に救われた。ふざけているようで私の真理を突いた。真面目な自分がいるからこそ、そうでない私も輝く。そのままの自分でいいと許された気持ちになった。言葉のナイフから私を守ったのは、皮肉にも真逆で、一見すると悪口のような「不真面目」という言葉の盾だった。真面目、時々、不真面目。これが私なのである。

言葉は天秤のようなものだ。私たちの感情を右に左に揺れ動かす。良い言葉を話そう。そんなことは誰もが知っている。でも、その言葉の善と悪をどうやってはかるのか。その方法はあるのか、いや、できないのかもしれない。例えば、誰かに向かって痩せているは善で、太っているは悪。痩せているは太っているよりも何十倍もいい気がする。しかし、真実はどうだろうか。病気で痩せた、あるいは、痩せていることに悩んでいるのかもしれない。自分にとっての良い言葉も、相手にとってはそうでないことがあるのだ。

言葉の基準は、人によって違う。その言葉は向けられた人間がどう受け取るかで価値が変わる。だから、自分が生み出した1つ1つの言葉を大切にする責任がある。一度出た言葉は消えることはない。たとえ悪意がなくても、たった一言で目の前にいるかけがえのない人を失うこともある。自分たちが発する言葉には、それだけの重みがあるのだ。時に、思いがけず、言葉で人を傷つけてしまうこともある。そんな時もまた、自らの言葉で相手の心に一生懸命呼びかける。私たちが口にする言葉は、誰かの心を温めることだってできるのだから。